

『教育の時代』一九六四年十月（東洋館出版社）

## ゆがめられた全面発達の教育理論

矢口 新

—

教育者がよく使う言葉に「わかる」とか「わからせる」という言葉がある。「わかったか、わかったらよくおぼえておきなさい」などという言い方はしよっちゅう使われている。わからせるということとは、教育者のたえざる関心事である。どうしたらわからせることができるかということは、教育者の最も苦心している所だといつてよい。

しかしこのわかるということもよく考えてみると、よくわからない人の話をきいて、わかったと思うときはある。しかし後でも一度それを考え直してみると自分ではよく筋が通らない。何かを忘れてしまつて腑におちないと思うことがある。あの時はわかったような気がしたのだと思うことはよくある。つまりおぼえていないのである。わかることと、おぼえていることとはどうも別のようである。わかったらよくおぼえておけといわれるが、そう簡単におぼえておけるものではない。おぼえておくつもりでも忘れるのである。

さてこんなことを言い出したのは、教育者はわからせることに大きな関心があつて、それを中心にして教育の方法を考えるけれども、おぼえさせることについては関心をもたないでよいのであろうかということを問題にしてみたからである。いやおぼえさせることに

関心がないのではないであらう。しかしはっきりしていないのではないか。どうしてであらうか。

どうも日本の教育では、わからせるのは教育者の役目であつて、おぼえるのは学習者の役目であるという割り切り方があるようである。一応はその通りにちがいないのであるが、でもしかし簡単にそう割り切つてすましてはおれないような気もする。それはわかるということ、おぼえるという立場で考えられていないからではないだろうか。そしておぼえるということについて教育者の役目が考えられていないからではないだろうか。これはこれまでわれわれのもっている常識的考え方とは逆のようである。つまり考え方が逆転しなくてはいけないのではないか。

生徒が教師の話を聞いてわかるといふのは、生徒が教師のように考えることができたということである。生徒にとつて大切なことは、教師とおなじように考えることができるということである。それがわかるという結果を生み出すのである。それを一度ならず、二度、三度、或は教師の助けをかりずに、生徒自らの力で考えることができるならそれはおぼえているということであらう。教師が説明をする。ゆつくりと説明をする。間違いやすい所を間違わないように注意しながら説明する。それを生徒が聞いている。それをゆつくり聞いていけば、生徒はわかるような気がする。しかしそれは、自分で、自力で考えたことではない。まだ自分でできるところまで行っていない。それは考える筋道に、多くの教師のヒントが与えられているからである。そのヒントがなくなると、考えが起らないのである。考えるヒントが自分で生み出せない。そういう状態から進んで、ヒントが教師によって与えられないで、自分で生み出せるようになったとき、本当に自分でできる状態に達したことになる。それがおぼえているということであらう。

多くのヒントが与えられてできるという状態から、ヒントが教師から与えられなくても自分だけで考えることができる状態になったとき、本当にできるようになったのである。本当はそれがわかったということなのではないか。教師の仕事はどこにあるかといえ、ヒントを与えてできる状態から、ヒントなしでできる状態にもって行くことだと考えてよいのではないか。いな教師の仕事に限らず、教育とはそういうことでないか。ひとり立ちしてできる人間をつくる仕事は教師、教育の仕事だと考えなければならぬ。

できるようになるには、あくまで生徒は自分でやらなくてはならない。教師の話を一度聞いて、あるいは一回の授業でわかったと思っただけでは、本当に自分だけでできるようになっているのではない。自分で教師の助けをかりずに、考えることができるようになるまで自分でやってみることがなくてはならない。といって一挙にその状態に達することはできないことはいままでもない。そこにくりかえしとか、訓練とかが必要になるのである。生徒にそういうプロセスを通らせるのが教育の過程なのである。

こう考えて来ると、これまでの授業には、問題があるのではないか。これまでは、「わかる」ということを目ざして授業をやつて来たから、生徒にわかったと思わせる所までに重点がおかれていたようである。そこに大きな間違いがあったのではないか。本当にわかるということよりも、わかったと思うことではなかつたのである。しかし、それがわかることであり、そうわからせるのが教育だと考えられて来たのである。これが学級の一斉授業を成立させて来たといっても過言ではないであろう。

教師が説明をして、「わかったか」と聞くと、生徒が一斉に「わかりました」と答えて、「それでは次に進む」という形である。この形

がわかることを基本にした教育の形なのである。それを長い間やりつづけて、それが教育だということをわれわれは信じて疑わないようになってきている。教育という概念と、その具体的な姿とは密着して、強い力をもってわれわれを支配しているのである。われわれは身体を通してこういう風に教育というものをつかみとっているが、それはわかるということを手台にした構造をもっているといってもよい。それはしかし、できるというような点から見ると、やはり大きな問題があるのである。それは様々な形で問題としてあらわれて来る。それを一つ一つ明らかにするのは大切なことである。

## 二

人間のもっているあらゆる機能を発達させる必要がある。人間の全面的な調和的な発達をはかる必要があるなどということは、誰も不賛成人はいないであろう。現代の教育学の第一ページに書いてあることだといいてよいからである。しかしそれが具体的にはどういうことなのかを問題にすると、またちがった考え方も出て来るというものがある。言葉の限りでは誰も不賛成ではないかも知れないが、その事実はどういうことなのか。事実何をやっているのか。

さてそこではじめに問題にした、教育というものについての考え方が問題になるのである。人間のあらゆる機能を発達させるというようない方をして結局は、それは具体的に教育として何をやるかということである。そうなる、つまりわからせるということをやることになる。あらゆることをわからせる、ということになって来る。そこでできるようにするという意識の稀薄なことが問題になるわけである。機能を発達させるといっても、具体的な方法としては、結局、わかったか、わかったらおぼえておけという方法しか方法としては具体

的に

はないわけなのである。全面的といえ、どんなことでも、そういう方法で取扱うということにしかない。多少極言であるが、しかしそういつてもよいと思う。

こうなると、生徒はありとあらゆることをわかったか、おぼえておけという形で与えられることになる。そういうことが極めてはっきりあらわれているのは、中学校や高等学校の教科である。中学校や高等学校の教科で一ばん大きな矛盾と思われることは、わかったか、おぼえておけという教師は専門家である。ただ自分の専門とする教科のことしか考えない教師ではないか。その教師は、自分の専門とすることに関して、生徒と同じ立場に立ってテストを受けてみたらどうであろうか。たとえば国語の教師が、数学のテストを受けたらどうなるのであるか。決して生徒が受けた場合にとるとおなじような成績をとることはできないであろう。いな高校ともなれば、ほとんど零点にちかいた点しかとれまい。それはほとんどすべての人が認めることであろう。一般の親でもそのことは十分わかると思う。中学校の子供の指導ができる親はよほどの親である。ほとんどすべての親はそういうこととはできない。しかしそれは自分が中学校の教育を受けなかったからではない。大学までも卒業した親がそうなのである。中学時代はちゃんとやっていた親なのである。ところが一人前になって世の中で働くようになった時には、中学生におよばなくなっているのである。

これはどう考えても奇妙なことである。どこかにおかしいことがある。教育とはそういうものだ、勉強するということはそういうものだと考えてよいことであろうか。

のである。あるいはその論理にしたがってやっている実体にまちがい

があるのである。一体あらゆる教科ができるということはあり得ないのではないか。それはさきにもいったように、教師が最もよくそれをあらわしているのである。所が教師が要求するのは、自分とおなじようにそのことがわかることなのである。教科書をみるとよくわかる。とにかくありとあらゆることがすべて書かれている。専門家として必要なものが書かれてあるといつてよい。そういう風にあれもこれもと要求されて来たのは、やはりわからせる式の教育観が根底にあるからである。わからせることなら、つまりわかったと思わせることなら、まだまだいくらでもつめこめると考えるわけがある。こうしていわゆる教育の内容は無限にふくれあがる。

しかしそれに応じて、生徒の方はますます表面的になる。本当にできる所まではともゆけなくなるから、ますますいかげんのものになるわけである。試験勉強というのは、こういう考え方の勉強であつて、日本の教育の基本的性格が受験というようものを生み出しているのである。受験があるから本当の教育が行えないのではない。教育が本当のものでないから、受験勉強というような妙なものが幅をきかすことになるのである。

ここまで考えて来て、全面発達ということから出発して、こういう妙な所に話が進んで来てしまったことを自分でも驚かないわけにはゆかない。全面発達ということがいかに空虚なことなのか、いかに甘いよりの事なのか、もう一度根本的に反省し直さねばならないのではないか。あらゆることをやらせるなどというようなことを考えてはだめなのである。もつと本当に、一人一人の人間が何かができる人間として形成されるのはどういうことなのかを、考え直してみる必要があるのではないか。

全面的に調和的に発達した人間とは、今の中学校や高校の教科が全部できる人間であるという言い方をしたら、誰しもおかしいと思うであろう。しかし現に中学校や高校では、それに近いことを要求しているのである。この教育の方法のあやまりはどうしても改めなければならぬのではないか。教科の羅列主義、教材の網羅主義、平均点主義、こういう一世紀前のものの考え方が依然として横行しているのである。一人の生徒を一つの人格としてみるというシステムは実際にはないといってよいのである。誰も一人一人の全面的な、調和的な発達を考えてはいないのである。これが全く古い教育の方式であるということに気がつかないのが現代の教育者なのである。

全面的、調和的ということが悪いのではないが、その具体的な方法が前世紀的なのである。

### 三

「子供は将来どうのびるかかわからない。将来どういう仕事ができるようになるかわからない。だからなんでもやらせておく方がよい。早くから何か一つの専門に入らせることは、危険である。せつかくのびるかも知れないものを早くからつんでしまつてはならない。」こういう考え方は誰ももっていることだと思ふ。そこで若い間はなるたけいろいろなことをやらせておくということになるであろう。その考え方はよい。しかしその次が問題である。そうだからどうするのだということになると、なんでもかんでもわかたかおぼえておけという方法でつめこむことになるのか。そこに大きいおとし穴があるのではないか。何ができるかは、何かをやらせてみなくてはならないことは確かである。いろいろなことをやらせてみるうちに、そのできる道をそれぞれが発見するであろうというのも考え方としてはあやまりではない。そ

れがしかし現代やっているようなわからせる式の教育でないことは確かである。わかたかと思ふというようなことをいくらつめこんでも自分で何ができるかを発見することはできないのではないか。わかたかと思ふ程度でよいのなら、なんでもわかたかと思ふのである。

大切なことは自分でやってみることなのである。自分でできる所までやってみる。そうすると、ある事柄は早くできるようになるし、ある事柄はなかなか出来るようにならない。ある事柄はどうもやる気が起らないし、ある事柄は進んでやるのである。その中から自分のできることを発見するのである。

今は自分でできることを発見するような教育になっていない。時々行なわれるテストは決してできるようになつたかどうかをしらべているのではない。全然そういう点がないとはいえないが、本質的にちがったものである。

所で話をすこし飛躍させるが、最近アメリカの教育者の団体NEAが一九六〇年代の学校のプロジェクトを提案した報告書が出たが、その中に、随所に一人一人の生徒をいかに全面的に発達させるべきかということをとりあげている。全部で三十三の勧告というか提案というか、そういうものがあげられている。その中の学校学級組織のことととりあげた所を見ると、第一に学年制のない学校ということが提案されている。こんなことは日本では唐突のように考えられるかも知れないが、わが国でももう本格的に問題にしてよいことなのである。

つまり学年制をなくするということは、根本的に教育観が、あるいは教育方法観がかわりつつあるとみてよいであろう。生徒がわかたかと思ふのでなく、本当にできるよになつて卒業するとしたら、これまでの学年制という方式ではだめなのだとということである。本当にできるよになるためには、一人一人がやってみること、したがってそこに

はスピードに差ができて来る。しかもさまざまな教科についてそうだとすると、実に千差万別だということになる。ある生徒はある教科は早い、ある教科はおそいということになり、一人一人がみなちがった状態におかれることになる。それをよく診断して、一人一人の個性を生かして調和的に成長させるということが教育の問題であろう。そこに全面発達ということが考えられるべきものである。全面発達とは一人一人の人格的構造に即して考えられるべきものである。

こうなつて来ると学年制にかぎらず、その他の点でも、われわれが現在もっている教育の方式を考え直すことが必要になつて来る。アメリカの三十三の提案もそういうことなのである。

一人一人を育てるといってもそれは寺子屋式の教育にかわるのではない。寺子屋式に一人一人を見ることになつたら、現代の要請する大衆教育は成立しなくなるであろう。一斉授業は大衆方式として生まれたいものであるが、それはそれなりにこれまでの時代の要請にこたえて来たといつてよい。しかしそれが誤つた考え方や誤つた形式を生み出した点があれば改める必要があるのである。大衆方式が知らず知らずにおちいつたのはやはり人間を忘れたことであつた。人間を育てることが忘れられて、形式だけが重んぜられた。教育内容、方法の発達といわれるけれども、人間を忘れてととのえられて来たのである。全面発達などという理念もいつの間にか形式となつてしまつたのである。

学年をなくするということになつて、しかも寺子屋式にならないためには、一人一人の生徒の歩むコースがはっきりしてはなくてはなるまい。つまり教育のカリキュラムとプログラムが十分に整えられているということである。いつも例に出すことであるが、ピアノの教則本のようなものがしつかり整つていて、それを順々に自ら学習して行くような体制になつていれば、生徒はセルフ・ティーチングの形で進ん

でゆける。そういうことを現代の技術の進歩は可能にして来ている。ティーチング・マシンやプログラムド・テキストが幅広く採用されはじめていたのである。そうなると教師は学級相手にマネキンをやるような仕事からは解放されるから、一人一人の生徒をみてやることができるようになるであろう。はじめてカウンセラーとしての役目を果たすことができるようになるわけである。

生徒は様々な教科について、いつも自分でできる状態になるように訓練をされることになる。それを通じて、どれが自分にむいてるか、自分の得意なものは何か、不得意なものは何かを自覚しつつ進むことができる。それは従来のようなテストによって暗記しているかどうかをみられるのとはちがうのである。ピアノの教則本でピアノがひけるようになるのとおなじように、自分はどこまで進んでどこまで出来るようになっていくかを自覚しながら勉強するのである。

教師はそれを診断して、生徒の調和的な発達をはかる相談相手になることができる。得意なものはのびしてやる。不得意なものは、どの程度までやるかは教師がよくみてやればよい。誰でもそういう得意不得意はあるのである。そこにおのずから人々によつてちがつた発達があるのである。それはあつてかまわない。一人の人間として構造をもつた教養人となるのが大切なのである。

生徒の一人一人を全面的に発達させるように、教育の体制が切りかわらなければならない。学級五十人の一人一人が一つの焦点となつてそれに対する教育体制が考え出されなくてはならぬ。ティーチング・マシン、プログラムド・テキストもそのためのものであるし、最近いわれるティーム・ティーチングもそうであるし、小集団学習もそうであるし、教育は一人一人の生徒を中心として動き出しているのである。

(国立教育研究所員)